［大野城市立御陵中学校］　　令和４年３月発行　学校便り

学校の詩（うた）

学校の教育目標
自律貢献

文責：教頭　藤田天平

◆第39回卒業証書授与式　「旅立ちの時」

令和４年３月１１日（金）、卒業を祝うかのような穏やかな天気の中、第３９回卒業証書授与式を挙行し、卒業生１０６名が本校を巣立っていきました。当日は、大野城市教育委員会 教育委員山口典子様、本校ＰＴＡ会長 上谷寛治様、本校学校運営協議会会長 桐ゆかり様のご臨席を賜り、厳粛な中にも、温かみを感じる式となりました。

式の中では藤井浩彦校長が卒業生に向けて、以下の話をしました（一部紹介）

「日本を美しくする会」の 鍵山秀三郎さんは、「幸せには３つの幸せがある」と言います。

一つ目は「もらう幸せ」です。皆さんは、生まれて間もない頃、ご飯を食べさせてもらったり、お風呂に入れてもらったり、おむつを替えてもらったりしました。そして、今も誰かに自分のためにしてもらうことがたくさんあります。それが「もらう幸せ」です。

二つ目は、自分で「できる幸せ」です。字が書けるようになった。自転車に乗れるようになった。サッカーができるようになった。他にもたくさんのことに挑戦し、できるようになって嬉しかったり幸せを感じたりしたはずです。

三つ目は人に「あげる幸せ」です。友達のために相談にのったり、寄り添ったりして、友達が喜んでくれたり、頼りにされたりします。困っている人に手を差し伸べる。相手の喜びを自分の喜びとする。自分のしたことによって、誰かが喜んでくれたり笑顔になってくれたりしたことで、嬉しさや幸福感を感じた経験が、これまでもあると思います。それこそが、とても尊い「あげる幸せ」なのです。

未来が予測困難な時代、そして世界中の平和が脅かされいる中、相手の立場に立つこと、相手意識をもつことは本当に大切なことです。本校の教育目標「自律貢献」でも示したように、皆さんには、主体的に学ぶ姿勢をもち、総合的な人間力を高め、人のために、社会のために、そして世界のために活躍できる人間になってほしいと思います。その方法や立場は様々でいいのです。誰かを「幸せにできる」人であってほしいと願います。

また、答辞では、第３９代生徒会長の肥後琥南さんが、今年度の生徒会スローガンに込めた願い、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴って、学校行事や学年行事が次々に中止となったことに対する悔しさ、そのような中でも、諦めずに、今できることを精一杯やろう、今の自分の力を出し尽くそうとみんなで考え、前へ進み続けたこと、行事ができることのありがたさや感謝の気持ちを語りかけてくれました。そして、最後に在校生、教員、保護者の皆様に向けて感謝のメッセージを送ってくれました。（肥後さんの答辞につきましては、御陵中ＨＰ「校長のひとりごと」をご覧ください。）式後には学校運営協議会会長の桐様が「肥後さんのメッセージは一言ひと言が心に響く大変素晴らしい話でした」と話されていました。

式後の学活は、1組が多目的室、2組が音楽室、3組が体育館で行い、保護者の皆様にも参加していただきました。子どもたちは担任から一人ひとり卒業証書を受け取り、一言ずつ思いを述べました。また、クラスによっては子どもたち自身で考えたレクリエーションを行うなど、学級での最後の時間を楽しく過ごすことができました。3年間過ごした学校での最後の思い出を、保護者の皆様とともにつくることができ、とても素敵な時間となりました。

時には陰になり、時には日なたになり、子どもたちを支え、励まし続けてくださいました卒業生の保護者の皆様、いつも温かい目で子どもたちを見守ってくださいました地域の皆様、本当にありがとうございました。肥後さんの答辞にもありましたが、卒業生のみなさんが「志」を高くもち、強く、優しく、たくましく生き、多くの人、地域、社会のために貢献できる人になってほしいと教職員一同、心から願っております。

「虫の目　鳥の目　魚の目」

【教頭コラム】

「東日本大震災から１１年」

「奇跡の少年」と呼ばれるのが嫌だった。それをこらえて生きてきた。

東日本大震災で北上川の近くにあった大川小は津波に襲われ、児童74人が犠牲になった。その場にいて助かった児童は只野さんら４人だけだった。

生き延びた児童の中で只野さんはただ一人、震災直後から報道機関の取材に応じてきた。髪の毛を短く刈り込んだくりくり頭や、明るい性格を思わせる言動から「てっちゃん」が愛称で、周囲からかわいがられた。だが、２年ほど前からは取材を避けるようになっていた。「俺なんかより優秀な友達が津波にのまれ、自分は偶然助かっただけ。『奇跡の少年』でも、そんな立派な人間でもない・・・」。内面にはこれまでため込んできた反発があった。

只野さんは、小学３年生だった妹の未捺（みな）さん（当時９歳）、母のしろえさん（同41歳）、祖父の弘さん（同67歳）を亡くし、自宅も流された。直後に取材を受け、見たままを証言したが「突然家族がいなくなったことが信じられず、涙も出なかった。どこかテレビの向こうの出来事だった」。

一方、遺族たちは悲しみを共有しながらも、置かれた状況で立場の違いが生まれた。子ども全員を亡くした親、行方不明の子を捜し続ける親・・・。避難経緯の検証を求める人や、そっとしてほしいと願う人もいた。只野さんたちは「笑ってもいいのかな」と大人に気を使いながら過ごしてきた。

感情を封印したかのような子どもたちの姿を見てきた保護者らの心配は募った。専門的な支援が必要と判断し、学習支援を通じ心のケアに当たる「ここねっと発達支援センター緊急こどもサポートチーム」（仙台市）に依頼した。地域の公民館や仮設住宅の集会所でサポートチームが「勉強会」を開くと、きょうだいを失うなどした小、中学生13人が集まった。最年少は只野さんだった。

外では元気そうに見えた只野さんだが、勉強会では寡黙だった。「家では植物と話している」と、サポートチームの前でこぼしたこともある。ようやく少しずつ話せるようになると「証言するのは、津波にのまれた瞬間を思い出して苦しい。でも亡くなった友達のためにも二度と繰り返してほしくないから話すんだ」と明かした。

令和４年３月12日　毎日新聞より一部要約

以前勤務していた学校に神戸から転入生が来ました。とても優しい子で、クラスにもすぐに馴染みました。中学校を卒業して２０年ほど経ちますが、今でも時々近況報告をしてくれるような子です。この子が転入してきた年に震度１くらいの小さな地震が起こり、翌日の生活ノートには次のようなことが書かれていました。

「私は小学２年生の時に、阪神・淡路大震災で被災しました。ガスは止まり、水は出ずに、給水車からの水をもらうために１日３回、家との往復をしました。地盤はゆるみ、地面は割れ、めくり上がりました。学校も階段が傾きました。学校の床にビー玉を置くと片方に転がっていきました。あの時はずっと泣いていました。（中略）今でも震度１ぐらいのみんなが気づかないような揺れでも、すぐに気がつきます。」

震災が起これば、そこには様々なドラマが生まれます。東日本大震災はもちろん、阪神・淡路大震災や熊本地震の時もそうでした。

震災で母親や父親を失った子どもたちの多くは、周りが驚くほど強く生きていくという話を聞きます。しかし、一見すると強く見える子どもたちでも、実は、心の奥底に深く残ったトラウマやさみしさと闘っているのかもしれません。東日本大震災から１１年経つ今でも、ＰＴＳＤ（心理的外傷後ストレス障害）に苦しむ人々がおり、避難所生活を送った４７％の方がＰＴＳＤだったという調査結果も出ています。それは大人だけでなく、子どもたちにもいえることです。だからこそ、私たち大人はそんな子どもたちのことを理解し、寄り添い、温かく包み込んであげることが「心の復興」にもつながっていくのではないでしょうか。